

門 へ 13
3098
巻 2

櫻姫全傳曙草紙卷之二

江戸

山東京傳補綴

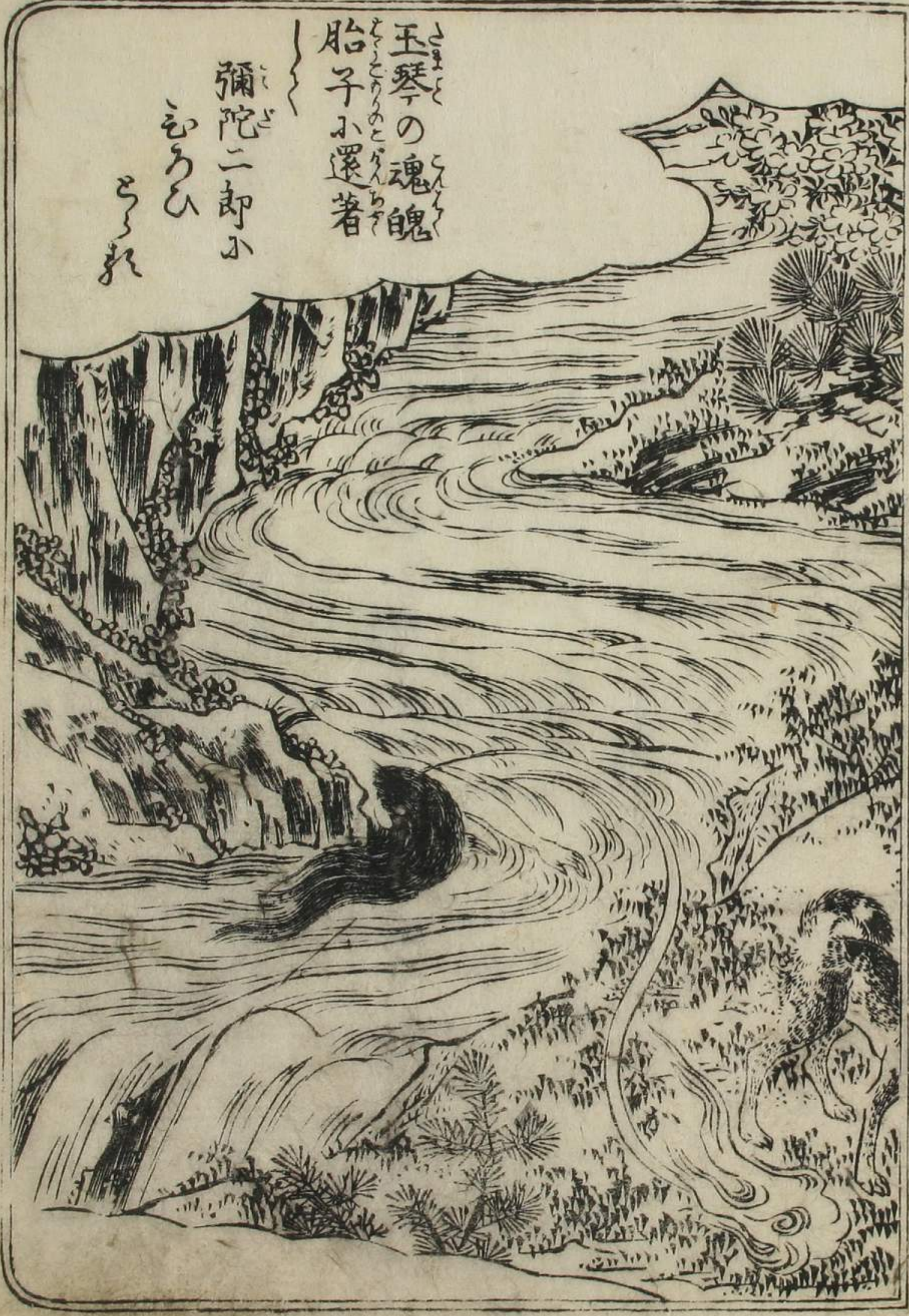
大吉

第四

玉琴魂魄還著胎子

さくも、の弥陀二部ハ佛堂建立の爲度、負錫杖とつた回國修行
者ハ打扮、山陰山陽の國々、旅中、小旅、年々、己
建久二年の春の、辰路、丹後國、つさぬ、あふ、り
古郷丹波、ふち、も、罪、く、困、か、れ、れ、又、あ、る、は、足、か
い、まん、こ、と、も、ら、り、あ、り、され、ど、今、ハ、心、孤、あ、る、と、あ、る、先、非、を、悔、の、ら、く、ハ
一切、と、立、く、旧、悪、と、償、露、を、う、り、も、洪、恩、と、報、せ、ん、の、と、あ、る、公、の、れ、い、と、
古郷、あ、つ、く、く、せ、め、く、土、に、あ、ま、ん、も、公、や、り、あ、り、且、ハ、主、君、の、安、否、も、も、
か、ら、く、と、し、く、く、あ、る、人、目、に、あ、る、り、あ、る、あ、る、と、か、げ、ん、大、江、山、或、哉、

昭和九年
七月二十四日
購求



明
卷
之
二

子とあり一念深く魂魄此子に還著し一命と保とらしむ不疑き
 我此子に養育せむは人の善根の成れむとど何方の人いふ者
 知れざれども偶我目ふかばに宿世の深縁縁ありめかく劍小身
 屠らむと大死をらるるを此世にあり地獄なり憐れむと
 つひつそのわらりの土に穿て屍を埋め一塊の石をおたかりの印と
 する鉦打あり南無新靈頓證佛果菩提阿弥陀佛と唱ふ
 回向しは両立去り情ありけり人家のつらき小児は湯と
 乳を乞ふのまゝめあどしけむや勢ひつと命とをうけり
 二即ちぶとくさうりありこれと始とて小児ある家とるむと立乳
 とむてやしありひかり旅中とのひ男子の身ありけり養育する公づ
 いうむりありん推量べし彼屍は乃玉琴をうたうなり大江山乃

谷川に沈きけりぐらりと繩をわき此石に流まつたりの飲けり
 まるき奇怪のこゝろふのうとや

第五 轎裏遺書公連償鼻

又彼玉琴を奪とて夜篠村が屋敷の子細を尋ね其頃にも
 篠村八郎公連の重た病臥し行歩りまると一子二郎公光とて
 今年十五歳ふりり角の若者父の病を祈禱乃為出雲
 明神に通夜と家ふれど折も折時も時ありん此夜ふかざり
 玉琴を奪とてはが小運命足るかざりおやめん父子のうら
 出ありけりやうとてうらむべれかり小野分の方奸智深き婦人
 ありて兼く其空虚をうけひと奪せりるるにぞし其夜侍女等
 盗人のうらむと起合せと叫り色と穿つけり篠村八郎

あまはさう時一家中の諸士お對して顔あしと敬ド是非なく
命なまごぞくわくありとくこれ眾公のぬる理なきと
こひねぐのゆるいむのさし一見子二郎公光の小臣が病な
祈禱の為出雲明神お通夜し家あしと其夜のゆ実お
存せざれば何ぞと彼お御慈悲をくし玉のさう。

あどこのやふ記一最期の急お臨とも子孫お親心のおりひやれ
殊お良深うりたりなは奥の方お盗人の取おしる物と拾ひつれ侍り
これと證お御尋のふしとわさく桐添る畳紙とゆつれ入るこバの乃
尾長の蝦蟇あり義治おらめ皆これおゆし大お驚たは日二郎
公光お子細お尋うおど公光つづさふ物語はむお去年捕へられ彼
婦おと奪蝦蟇つひの賊おの余類の所為の疑ありと評議し

義治お其始終おまよとを詞もあし只さうりあれたのて物とし
されけしひかり公光これおんやうらの骨お砕うらおのひて
やう差添と抜く腹おつたしとんと義治色うらと色さめよと
ひこれ造酒丞やうその刀おりだらぬ時お義治面おふしと
ひさしハ即我命とまごど私お自殺をるると誤とおりのふゆも又
我のうらうけど自殺せんときおの何の道理ぞ玉琴賊おらうと
とらへもいまま生死とらめと汝さづらおのらとさどの暇ともおの
賊お尋知し玉琴おらうとく父の罪とも償ひ我愁おもやとあ
ざる若年とらひひあが愚おれ奴らな活く功とまてんや死しと
我お背んやいなくと色一筋し責けお公光へ一言の返答ある
叫苦一色しとあそれうらと伏居る義治表お怒の色とあを



志の切
 條村八郎
 公連玉琴
 分説
 轆裏
 自殺
 罪を
 け
 ま

曙卷之二

とつども裏あ情の意なく不幸あり一個の良臣が失ひしを
深く惜かりひくひと涙さぐぐと流るべし主君の仁心は感
しく頻ふ落涙し小臣思慮浅くさふなつたゆゑさうあらひ
ぬらぐいさむの御暇とまづさうの賊たてひ天小路ありく
上つ地小門のりくへる飲さうさう深淵の底猛火の裏おぢくとも
念力の誠なびく尋中王琴殿が奪へし御心か安んぞぞと
ひくぬらふあぞ義治のうもいとゆかさるべさうかとりらひく
ぬへ又さうさう此傳とさふ菩提所へ送りゆけこのひく打さる
？奥の回ふのりけさへ公光の其背後に仗拜と感涙袖とさうさう
造酒丞いひくは小人先刻王琴殿がひひの為和殿の宅おひたる
時は親父もさうさうさう実へ昨夜王琴殿が盗人あうぞこの

小臣直小相公さあけさう衆を賭しと御ひひの乗物お小人
をさふせ玉琴殿の体ふりてさうさう取まりさう此更の思ふもかき
知らせ玉りたさうさうゆゑ自ら殺さる察しとそれとさうさう
らふた公座さうさう若うけひりごんが其後死ぬる面色なり
義氣一徹の老人あさびさうゆれもさうさうはせめさうお小任さう
望のさうさうさう果してわくならむひぬ和殿の愁傷さうさう
さうさうはけさうさう玉琴殿と奪へし目出度取参つさうさう
亡霊のよれ供養さうさうの涙さうさう小慰むさう公光はささ
さあ今日さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さもあつさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさう言ひつさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

時うのりゝ主君へのおととあり小人も送れべしとにら
く乗物とくれ出さめつひ小野邊小送りの夕の霞小まて
むろく煙とあしめ哀をうたふのそくあり

第六

野分方季春 誕櫻姫

去程小義治の世嗣とまうけく宿願とどげりと喜びし
玉琴とろびと野分の方の隠悪と夢あも知を一向愁く居り
くが野分の方の計な志とまうけり心中小まむ玉琴の懐妊乃
様子且ろびとまうけり公連が自殺のことまもめくやる体
かりくほくの小敬馬悲むとほわめくもくたそく假
哭みどしけとバ義治其体をとんくさくさく誠あるは小ま
かじかたさる我誤ありとや打明く縮のうら小まか

かる凶事へのまらりのこと悔さこそえたりと後野分乃
方よりぶふぬららしく慰めくさかおのづう夫婦の中前のとく
小睦と深くありつひ小まかめくならくれバ義治ととどめ一家中の
まむあめなうと神佛小安産祈と臨月遅くと待産けるが
夢のごとく小その年もく建久三年壬子の三月十日といひ
む乃とれた女子小安産り義治の喜びいふとと切山女子乃
名何と名づくべさやと高議しけり三月十日花咲盛り小生さ
あひ殊小櫻町中納言成範卿の孫あま櫻とひく名とまうけり
心決し櫻姫とと名はまあり

抑櫻町中納言成範卿とと武智管十二代の孫少納言入道
信西の三男なり長門本平家物語と案る小被郷小櫻町と

「けり 夏ハ櫻を殊小愛しあひく姉小路室町の宿所小惣門
の見入より西東の町を廻り並木の櫻を植通されりなれば
春の朝を立ちこち人異名ふ此町は櫻町とすは盛衰記小吉野の
櫻を移し植と云
又一向花ふ心を移し花の陰あき守り明されれば櫻本中納言も
アとこゆく春は悲しく来まれば春を悦び櫻を待し人かまふ
櫻待中納言と詔あひ下されりしころ源平盛衰記云成範卿
殊小執しとつれける櫻あり七日お咲散るし歎歎く春毎小花
の命を惜み泰山府君祭をけりう天照太神小祈りさせ
給ひぬれ三七日の齡を延たりたりさればうきをひつづけ給ひる
千早振現人神のかとされば花も齡へのび小けるるな
群も御感あり花のりふ此人をぞまふたくと勅書櫻町の

中納言と仰るる云くかく櫻を愛あひし人の孫姫されば櫻姫と
名づけしもうべありたり

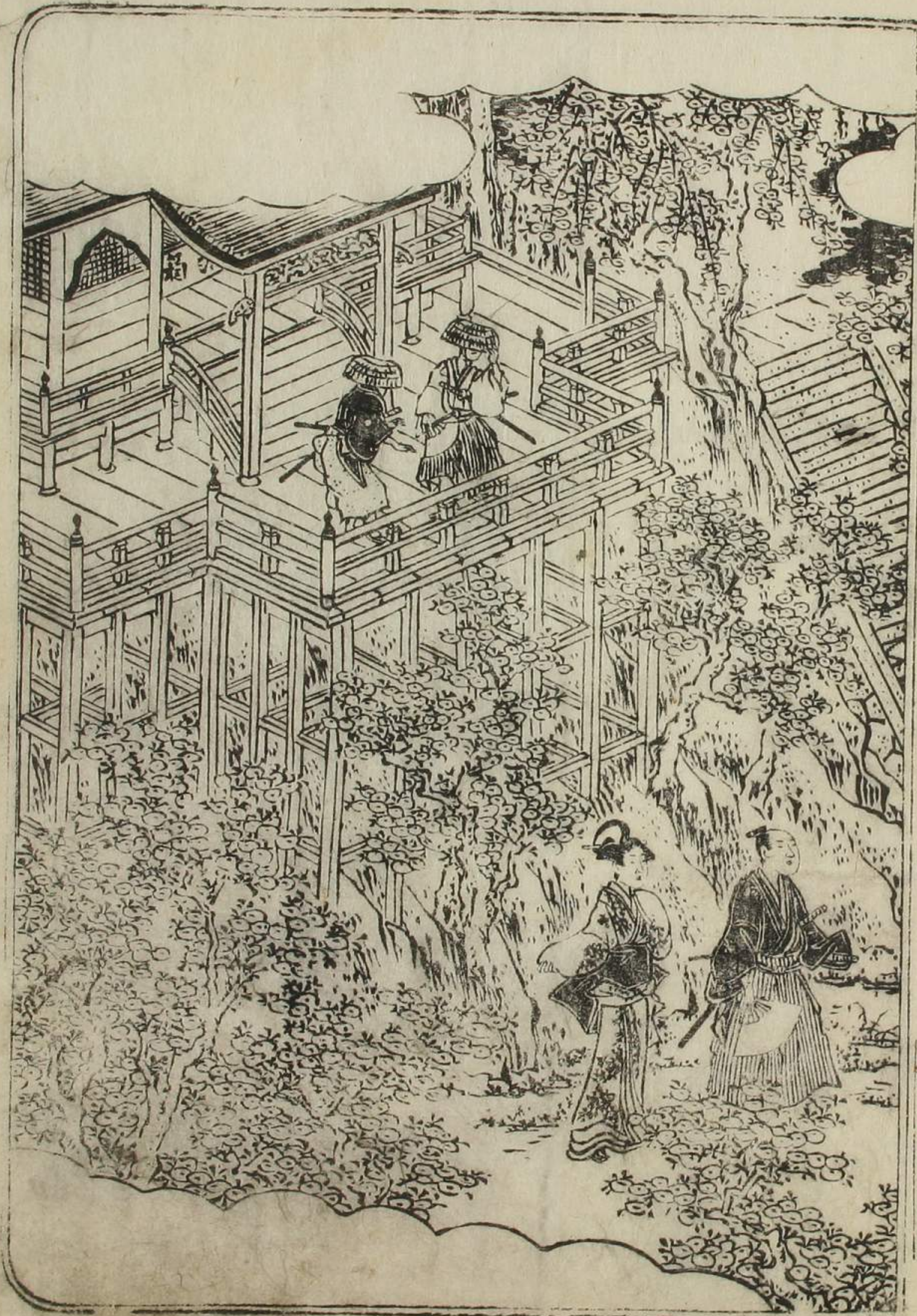
今年建久三年鎌倉おのり頼朝公征夷大將軍の宣下あり天下
尽く賀詞なすりしころされり四海大不靜寧あて万民安堵乃
あひとませり建久九年つぎと八十三代土御門院の御宇とあり正治
と改元のり正治二年わき建仁と改む建仁三年わき元久と改
む元久二年わき建永と改む建永一年わき承元と改む年々
馳るごとくしとまふりしころとまほし流水の海に皎くさ知
建久三年より建永元年まじり十五年が同葛尾の家無為ふ
物語へ記とべれ夏ま

第七

清水清女春戀櫻姫

まうごも此野不信太の一族残つと住くれおや此平を夫容見くらむと醜悪
わて性質さひやく 奸佞かりちちのさるるど 驕奢お長し酒色不耽
不仁と好む礼義をわくど 田夫野人おひとく 凡輩あつたひのひま
お櫻姫を相看しやうん深く執愛して 轉相お逼りかきする者を媒お
たのこころこころと娶とあふむごんバ婿とあふんとのでとるるが義治日来
平を夫と爲人とみくも居られればさふろけグハど入りく 彼が行の
めいれをかぞへくさめく 誹謗しるふぞ媒人の口を閉面目お失ひて立
えりありのまふ語るが平を夫大ぬ憤深く 義治をふくく 遺恨の
原とぞかりふくは是乃櫻姫の一旦零落とべた端ありたり 柳橋ひめ
の祖父成範卿の性とうけつたるふやめりくの花と好むうちあも
わまうく 櫻姫愛し庭りせお柳と植まうく 春毎おさめあふさうらうらぶ

都お花の名所おわしと上京しとたより願ひくれ義治あまは
許し家人田島造酒丞美長并お山吹とのふ女兩人お旅中乃守護と
やうけ旅のよとやひおそのへし此山吹といふ家人佐伯平弥二と
いふ者の女あといふと年若けいとも志正しとわとた女あればひて
孫ひめが守り女とあしとわづせりるるりりり 其余侍女女童下部
かどおまご具さめ三月上旬お発駕せさうりりりり 孫ひめへ旅
めくしく 殊お暗和の天氣お催されく 諸山の花お発春草青くはれ
野外の好景お目さしひるらうらうらう 氣もともゆもうれらうて 行程の
うさぬさうさといともぐらうもまきれどわどかき 都おつたて 旅舎お逗留
し此彼の名所舊跡と認めらうらうらう 名花とらうらうらう 一日おあ
地主の孫おんくまが 嵯峨仁和寺北野のらうと道遠しはひみ



曙卷之二



櫻姫
清水の請
地主の櫻
賞
和歌の詠
晴玄櫻ひめ
春意と

三密のつとめらゆる八正の道（一） 妄想まうごう 世塵よじん

道力堅固どうりきんこ 行ぎやう 曾魁そうけい 語ご 雜劇ざげき の院本いんほん

等らう 勸懲くんちやう の意い をを 普ふ 見女けんじよ の耳みみ 清水しみず の清しみず

法師ほふし 乃な 是これ あり 裏坊うらばう 住すま 清玄しみげん もひく

索さく 小説せうせつ 文ぶん 清淨しみじやう 之の 處ところ 曰いふ 西清せいせい 又また 清酒しみしゆ 玄酒げんしゆ 明水めいすい 也なり 云いふ

清玄しみげん の法号ほふごう これと據とら 欽きん 玄げん の水みづ 也なり 清玄しみげん の文字もじ ぬの

清水しみず の義ぎ ぬも又また 不可思議ふかぎ ありとや

此こゝ 時とき 清玄しみげん 香水かうすい ぬと供くわ せんといふ

石段いしだん のの 上うへ 偶ぐ 顧こ 撫ふ ひめと顔かほ 入い 合あ

櫻さくら ひめゆのゆげの ふうらの 時とき 一陳いちぢん の冷風れいふう さと吹か り

梢さか の花はな とらじの 清玄しみげん が皮肉かわにく 小こ 冷ひや とやれとやえしが神かみ を醉よめ ぬ

如ごと くあり世よ あり義人ぎじん もあり

開伽あひが 桶かづ をを 提た げり

哥うた のの 桶かづ あり

魂たま 空くう 飛と ぶ

佛ぶつ 戒がい 小せう 女にょ 人じん 近ちか づく

二脚ふたあし 三脚さんあし あり

諸人しよじん のの えとがめん

けりの 撫ふ ひめ

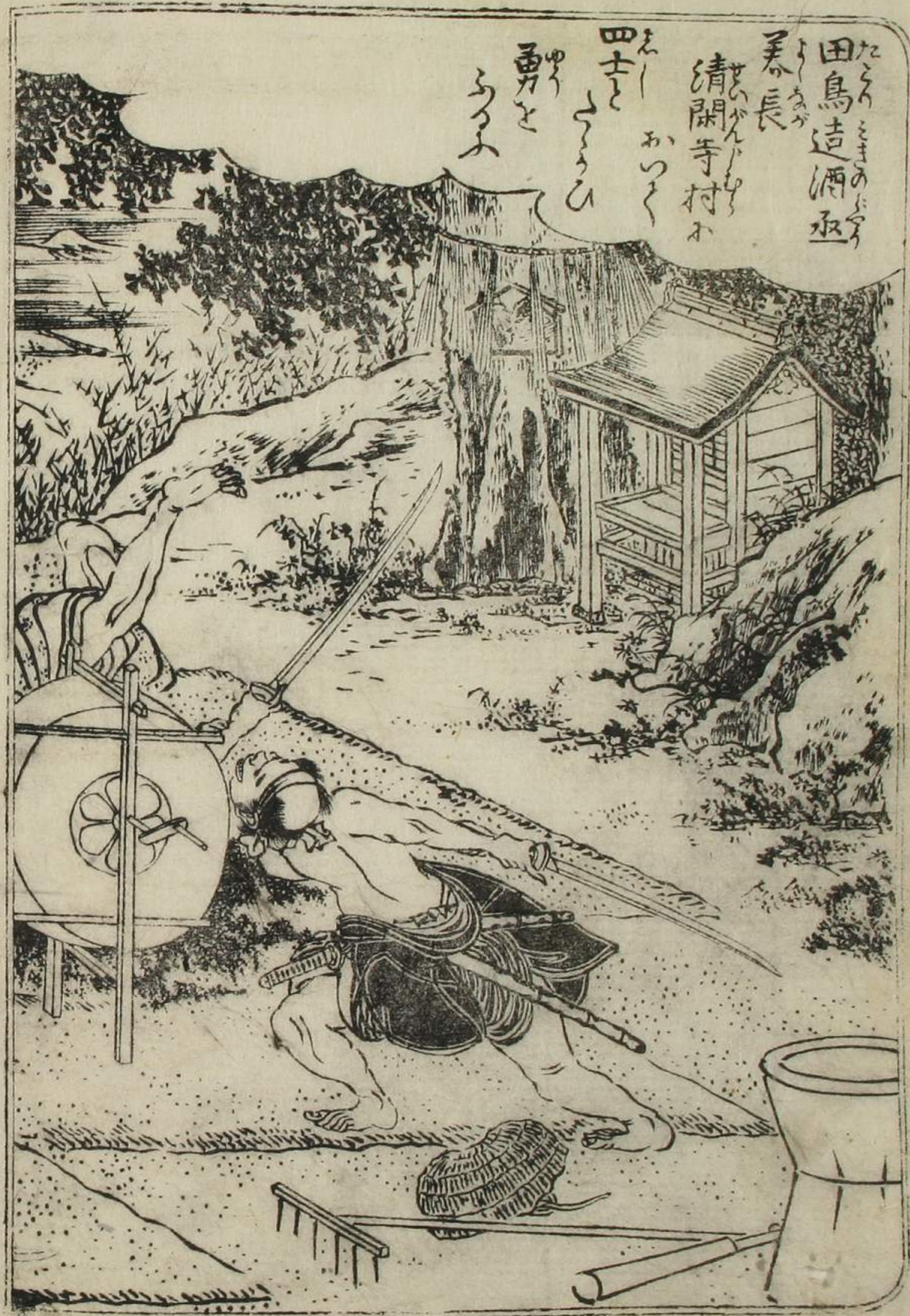
移うつ 花はな あり

改路かいじよ あり

長刀ながたな あり

武士ぶし 二人ふたり 扇あふぎ あり

醉よめ あり



田鳥造酒取
 美長
 清閑寺村
 四士
 勇と
 うふ

明卷之二

まさればこい何とぞとべたところらまどひと誠おせんうさあれ折しも
川さし柳のわげ小櫓の音ひびきく一艘の小船と漕おし船中のあはじ
ひくろふそれるる女中ふりのアんよりありげあう上臈の俄お胸病あか
えうけきりりさどまりびくおがさきん此船お乗まわうして衣抱
まとの山吹られぬ背を顧こころ情深たあせうまらふ
かごと危急の難義お逼りゆいりりかどいあどと借とるんと
ひびきさあへく船お岸おつけぬ山吹うれく姫を抱く船お移し
けり小船中のあはじ印籠より薬ととりやうと湯あとのほじめて
そのお小抱りりそのひありく揺ひめや胸のうろさ瓜志と人ぞら
つれぬまが山吹いよめ息吻とつさく安堵のどひくぐらひめやうく
頭おあげく船のあはじとんふ年のごらひ二十とらうとさえく又ととひ

また美男なり鳥帽子商人の大大郎やとめらん今様の鳥帽子
小紺松の紺五郎さどり漆うん褐色の袴著とさうくくかざら
うろ小鞆巻とびい衣紋のわが六波羅様お著あていと風流お粧ひめ
大太郎組五郎 共お盛衰記お出 まは船中のさるとるる唐花お織出く毛席おぬぬ
提盒標子やりのりの偏提あどららうつ芥川の根芥桂川の若鮎此
まがれの氷魚あども香わら調はらん船のわあいかうけられ男の
量野風颯の火とのあだ居つりあ人の振付あふまのびと出五
しとのかゆのれら探ひめあせえ船のうらふから美男子ととを
ちとちと居るる耳やうり執事らく何とさふおとこのひりま
唯どうううた聴お袷おかうづきくくらうひくぬが胸のうりの
かゆひの波のあうくむらうかうから風流士へ又ととひのうどと



三木之助
伴宗雄
宇治川
船遊
櫻姫の
急病を
とくふ



のちくのおりひ種を植とめり若人もかまじかりひ小胸とて
ぬめて時うつり日もくれと夕月夜のかろげあもま
とみやはしほ媒ならくろあん橋の小島ふを死めりあれ兵部卿
のふ四阿家とわく船小来あふ付のりて八千こせもあれ此流乃
雲の泣さぬたがひのかりひなくべつだれ風情まう山吹ハ志し
女あればめり若人のかろく小姫の長居せんをめりるると公はま
あつくは場の思ひ謝し姫を催しくまうるんとしたる時折さ
田島造酒丞とく子来り侍方下部等も追ふくせあつまり衆皆
姫の言るる喜ひ取路とらまじく橋子小扶のびくれば姫ひき
かの若人を顧しつれと惜む若人の姫かえかろく公は残して
船かてりたうひの偷眼おかりひとあしじりのいそめ山吹乃瀬

るぞと別去りりかの若人何人と尋ね播州兵庫の郡士伴
希雄の息男三木之助伴宗雄といふ者あり頃日上京し此日宇治
川おぼびくおりのひうけど橋ひめ狐足とめけりなりと造酒丞
山吹ハ橋ひめ狐守護し旅舎お解り此日の事おぼりあひくおの
四人の者等いこし信太平大夫が家人なり油断まうぞと
畷國おまうまうぞと翌日俄お発足しなるとぞ

第八

退去清水清玄落魄

さても清玄ハ橋ひめと春憲しせめくの公やうと花おつける短冊
とろく人の哥の意のやとく手跡のさゆりふらとゆのひ
とろくおのあさまはくかは死んうあとおおひとゆがへ一
うらふ引籠観法定坐せし胸の佛のさくおかくまうく人の



清玄自懺悔と正覺の
 飯さんとと初ると
 不動念怒の
 容櫻ひめの艶麗
 みる安ふらんえく
 允情出離
 ちがご

の容忽様ひめの窈窕なる姿と見えかげろひのごとく目前小ありの
のさうと再又眼をとどまば又明王の容とありむけ姫の姿と見え
さうまへ明王の容と見えくらうと念珠の數百八の煩惱さう小消滅
さぞ妄念まじく出離せざればとと落涙我かきまじく誠心
さうさうへも凡情とまぬれさうとあり宿世の報さうんけう
へせんさうは佛の眞罪うけさうけよ背さうとむけかのひめの住兩姓名
さうねども我執著の一念さうさうさうさうのさうさうさうさうさう
おへさうさうといひく眉をさうさうさう眼血さうさうさうさうさうさう
焰のさうさう念珠をさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
經卷も尽くひささうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
明王の火炎とけらさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
魚熱大魚熱の光景眼前小ありさうさうさうさうさうさうさうさう

さほのさ小あり獨鈷三鈷羯摩花血蹴散さうさうさうさうさうさうさう
の頼豪が氣と化とさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
合破とけらさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
姫さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう



